

「無明塾」余話

窪島 誠一郎

毎夏浄運寺でひらかれていた「無明塾」が、去年で一まず終了ということになって、何だか今年の夏はとてもしみしい。何しろ二十年近くもつづいた恒例行事だったから、八月の声をきくと身体の芯が「浄運寺」詣でを催促するのである。

とにかくこの年一どの、浄運寺での中野孝次先生、秋山駿先生との三人コンビの講演会はたのしかった。たのしかったというより有意義だった。両先生とならんで私が演壇に登るといふことじたいがこの上なく光栄だったのだが、私としては自分の受けもちの講演が終ったあと（私はいつも一番最初）、そつと会場の片すみからお二人のお話をきくのが何よりの勉強になった。長明、良寛、兼好、法然、道元、西行……先人の教えにならないが現代人の死生を説く中野先生の切れ味するどい人生訓や、ご自分の生活体験をモトに丁寧に噛み砕くように話される秋山先生独特の文芸論は、あつというまに私の小さなメモ帖一杯にした。

主催でひらかれる、その折々のゲストをまじえた食事会も待ち遠しかった。「無明塾」発足の頃はもつぱら近郊の温泉宿にくりだすことが多かったのだが、途中からは三人とも長野市内にホテルをとってもらい、住職さん案内の料理屋さんで一献かたむけるのが定例コースとなった。どこに連れていってもらっても、私にとっては頼ったの落ちそうなお馳走ばかり、日本酒の銘柄には人一倍くわしい中野、秋山両先生のおかげで、ふだんめつたにありつけない名酒を味わえるのもこの食事会の特典なだった。

「いつもは一汁一菜のつましいお寺暮らしですからねえ、私たち夫婦にとつても無明塾の食事会は年に一度のおごつ、そうなんですよ」

ご住職はそうおっしゃっていたが、心底ご夫妻とも私たちとの酒宴をたのしまれているようだった。それと、もう一つ私の心をなごませたのは、私たちがそうやって町で夕膳をかこんでいるあいだ、お寺の庫裏でも裏方さんたちの「ご苦労さ

ん会」がひらかれていたことだ。「無明塾」が毎回滞りなく挙行されるカゲには、駐車場の整理、聴講者の受付、会場の設営、お茶の準備といった裏方をひきうけてくれる協力者の存在が欠かせない。そんな「無明塾」応援隊とでもいふべき世話人の方々、檀家の方々が、塾の無事終了を見届けてホッとくつろいでおられる姿が、



昨年8月25日に開かれた無明塾

「塾」に特別参加されることになったヴァイオリニストの天満敦子さんが「とても響きのいいお寺ね」といつていたことがある。

天満さんは、ご自分の演奏と本堂の音響効果のことをいつていたのだから、私共、人間の調和といったふう置き換えて合点したものだ。そう、お寺はいつも人の心、人の輪がひびき合う場所であってほしい。何たって法然さまは「たとえ念仏を誹謗迫害する人であっても仲間と思いなさい」といつたほどの救済者だったそうなのだから。

法然さまで思い出したけれども、先日読んだ本のなかで秋山先生が、浄運寺ご住職から奨められた「大菩薩峠」の作者中里介山の「法然」を読んで、法然上人がどんなふうにお教を特権階級から民衆に解放していったかというナゾがわかって感動した、と記されていた。私はその「法然」をまだ読んでいなかったのだが、「無明塾」の番外で秋山先生と住職がそんな本のやりとりをしていたのかと思うと、ちょっと羨ましかった。そして、秋山先生にとつてもあの「無明塾」は時として大切な学びの場になっていたのだなとわかって、何となくうれしかった。

なんだか私の眼にはとても好ましくうつつた。「寺を地元の人々の交流サロンにしたい。無明塾もその活動の一つ」とは住職の日頃からの口グセだったが、そういう意味でも、十数年にわたる「開塾」の成果はちゃんとあらわれていたのではないだろうか。

（信濃アツサン館「無言館」館主）